

『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』

『フェンスレス』オンライン版（第四号）

● 特別付録 資料1

## 新発見資料

『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』解説

伊藤 純

### ●資料の概要

最近（二〇一五年）発見された『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』（以下「提案書」と略記）は、表紙とも二十八頁の冊子（16cm×24cm・いわゆる半紙版袋とじ）で、謄写版印刷だが、その筆跡は貴司山治自筆と推定できるものである。

冊子の表紙には「大会議事録附録」と書かれており、二頁目に、同盟員提出議案として「文学大衆化の問題」など四つの議題が列記されている。

そしてこの印刷物は、版面の一部に、謄写版を沢山印刷した場合に生じる特有の原紙の破れが認められるので、恐らく数百部印刷されたと考えられる。また、文意がつながらなくなるような乱暴な墨消しが二十個所に亘って加えられている。

この墨消しの意味は、山田清三郎の記述から推定できる。山田清三郎は『プロレタリア文学』一九三二年四月号に「大会を通じて同盟の發展を見る——第五回大会を前にして」という長文の記事を掲載しており、この中に第二回大会についても比較的詳しく述べているのである。

それによると——日本プロレタリア作家同盟（以下「ナルプ」と略す）第二回大会は東京本郷の仏教青年会館で、一九三〇年四月六日午前十時から開会される予定だったが、直前になつて臨席警官の干

渉により議案書の一部抹消が強制され、その抹消作業のために開会が一時間以上遅れた、と記されている。

これらのことから、今回発見された「提案書」は、実際に大会会場に持ち込まれ、そこで墨消し作業が強制された上で討議のために会場に配布された議案書の「付録」、貴司の「提案書」現物の一冊であることが推定できる。

### ●ナルプ第二回大会と「提案書」

ナルプ第二回大会は「文学大衆化問題」が議論された大会として、プロレタリア文学史に記憶されている。前記山田清三郎の記事の中にその大会の議題が書き留められている。すなはち——

- 一、開会の辞（立野信之）
  - 二、議長副議長選出
  - 三、大会書記任命
  - 四、友誼団体祝辞
  - 五、同盟報告（山田清三郎）
  - 六、作家活動報告
    - （イ）小説（立野信之）
    - （ロ）戯曲（久板栄二郎）
    - （ハ）詩（中野重治）
    - （ニ）児童文学（猪野省三）
  - （ホ）批評（藏原惟人代中野重治）
  - 七、役員選衡委員選出
  - 八、中央委員会提出議案
- （一）一般活動方針（川口浩）

- (二) 報告文学（鹿地亘）  
(三) 同人雑誌聯盟組織（鹿地亘）  
(四) 縄領及び規約変更（川口浩）  
(五) 「戦旗」三千円基金募集（壺井繁治）

九、同盟員提出議案

- (一) 文学大衆化の問題（貴司山治）  
(二) 同盟員統制（同）  
(三) 作品研究会設置（同）  
(四) 機関紙発行（同）

……以下略

などとあり、この九番目の「同盟員提出議案」という四項目が、本資料に一致する。しかし、山田文書では、この「同盟員提出議案」については言及がなく、どのような討議があったのかはわからない。唯一、今回発見された「提案書」（大会議事録附録）が、提案の内容を具体的に伝えるものと考えられる。

### ●ナルブ第二回大会前後の大衆化論争の推移

この「提案書」の位置づけについては、前記山田清三郎が『日本プロレタリア文芸理論の発展』（叢文閣、一九三一年一月）で要約している。――

わが左翼文芸の陣営は、すでに一応解決されたかの如くに見えた『文学大衆化』の問題を、ここに再検討しなければならない機会をもつことになった。その直接的動機となつたものは、同志貴司山治によつてなされた、この問題に関する日本プロレタリア作家同盟中央委員会の方針に対する反対意見の提出である。

また貴司自身、戦後、尾崎秀樹との対談（私とプロレタリア文学）『文学』岩波書店、一九六五年三月号）の中で――

（＊第二回大会の前）自分（＊貴司）の考えを来て話せということになつて、中央委員会に呼ばれた……場所は下落合の片岡鉄兵の家で……片岡鉄兵、徳永直、鹿地亘、川口浩、山田清三郎、中野重治、立野信之がいました……文学大衆化の問題について：討論会をやつたわけです。引続き、それを四、五回やつたかな。

と述べており、さらに大会のあとでも議論が続き――

……私は中央委員にさせられました。それで大衆化問題の続きをやらなければならない：四月ごろから四、五回ぐらい中央常任委員会でそれを討論したんです。

と述懐している。

この、大会後の中央常任委員会らしき会合での議論の様子は、江口渢が極めて具体的に『たたかいの作家同盟記――わが文学半生記・後編上』（新日本出版社、一九六六年八月）に書き留めている。

たしか第二回大会がすんだあと四月もおわりに近い天気のいい暖かい日だったとおぼえている。……中央委員の大部分が下落合の片岡鉄平の家に集まることになった。……討論の中心的な対象者である貴司山治はもちろんのこと、中野重治、立野信之、大宅壮一、藏原惟人、壺井繁治、鹿地亘、江口渢、窪川鶴次郎

などの顔がそろう。

(\*大宅社一の発言・おそらく『講談俱楽部』一九二八年七月号に掲載の貴司

山治「獅子を殺す男」について)「争議団の闘士が社長の大資本家の家におしかけていつて、玄関につないである用心棒のライオンをいきなり撲り殺すところがあるな。あんなのいかに何でもだらめすぎるじやないか」

(\*貴司)「しかし、きみ。ああいう事を書くと読者がとてもよろこぶんだ」

「読者がよろこぶことと、その作品がいいか悪いかは別問題だよ」

とだれかがいう。

「でも、読者がよろこんで読んでくれないものをいくら書いてもしようがないじやないか」

(\*「ゴー・ストップ」についての壇井繁治の発言)「……争議団の闘士がストライキをぶちこわしに来た暴力団の親分を斬りつけ、闇にまぎれて逃げるところがあるね。……逃げ場にこまつていきなり橋の上から隅田川にとびこむ。……闘士はそのときたまたま橋の下を上流に向かって通る汽船のカジにつかまって……船上に助け上げられる。……その若い船頭はまことに徳島県の塩田労働組合の争議のとき、その助け上げられた闘士の身代わりになつて留置場に二か月もぶちこまれたことのある同じ青年同盟の同志であつたとわかる、というところがあるだろう」

「うん。あるよ。それがどうした」……

「世の中あんな都合のいいまわり合わせなどというものがあるもんじやないと思うな。……われわれの文学ではあんなふうに偶然性の上ばかりにのつかつて事件が飛躍するのではなくつ

て、もっとリアルに問題を発展させなくつてはいけないんじやないかとぼくは思うんだがね」

……貴司山治はひどくふきげんになつて……にわかに黙りこんでしまつた。

……帰りは貴司山治といつしょだつた。(＊江口と貴司は同じ吉祥寺に住んでいた)

「きょうの討論はなかなかさかんだつたね」というと、貴司山治はそれに答えずただひと言、

「壇井という男はバカだね」……

と吐き捨てるようにつたと書かれている。

昭和五年の大衆化論争が、具体的にどのような問題意識で論議されてきたのかが、どんな論文よりも分かりやすく見えてくる一文である。

## ●大衆化論争の帰結

「提案書」が提出された作家同盟第一回大会の三ヶ月後、「戦旗」(第三卷第十号)に大衆化論議を総括するかの如き作家同盟中央委員会の「芸術大衆化に関する決議」が掲載されるが、これは「芸術大衆化決議」と題しながら実質は「大衆化を拒否する決議」となつてゐる。要約すると――

①何等かの特別な大衆芸術の形式が存在するかの如きは幻想である。意識水準の低い大衆を目安にする大衆芸術では「イデオロギーを割合ゆるやかに」水を割ることが許されるというのは誤りである。

②在來のリズムも通俗化された大衆芸術も共に、実生活の

基礎を失った芸術形式である。過去の形式が直ちに我々の形式となることは絶対にあり得ない。

③芸術大衆化の唯一の目的は、広汎な労働者及び農民大衆の中に、革命的イデオロギーを浸透せしめることに他ならない。仮にある作品が如何に多くの大衆の反響を獲ち得たにしても、若しそれが革命的プロレタリアートのイデオロギーによつて大衆を捉えたのでなかつたら、このような大衆化は全く無意義である。

結局貴司のいう「文学大衆化」と作家同盟幹部の考えた「大衆化」とは、噛み合うことのない別世界の想念だったといわざるをえない。昭和五年という時点でのプロレタリア文学運動の一つの姿を伝える資料である。

(表紙)

## 『大会議事録』附録

(2頁)

同盟員提出議案

- |             |    |    |    |
|-------------|----|----|----|
| 一、文学大衆化の問題  | 貴司 | 山治 | 提出 |
| 一、統制に関する件   | 同  |    |    |
| 一、作品研究會設置の件 | 同  | 同  |    |
| 一、機関誌発行の件   | 同  |    |    |

### 『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』

#### 文学大衆化の問題 提案説明書

貴司 山治

はしがき

この問題については、この大会の直前、大宅壯一、徳永直、私などが特に中央委員会へよばれて行つて、いひたいだけいふといった懇談の形で議論をしたのである。その結果中央委員会と、特に私との議論が違つた。それを時間がたりないためにあと十分討論をつくす機会がなくなつて

- 凡例
- ・ 仮名遣いなど、すべて原文のままとした。
  - ・ 墨消し部分は「＝＝＝＝＝＝＝」で示した。

た。で、お前のいふことは、別に議案として大会へ提出しろといふ中央委員会の命令である。私は一同盟員の自由討論のために、中央委員会がしかく深切な手続をとられたことを同盟員として感謝する所である。——そこで私は自分の考へのその後の考へ方をもつけ加えて、私の提案の趣旨をなるたけ詳しく説明することにする。

一、問題は一昨年度に於いて解決されてゐる。

プロレタリア文学大衆化の問題は作家同盟内では一昨年度（一九二八年）に於て（\*次頁行頭）

4  
頁

大体正しく論議されるとと思ふ。この年の議論の代表的なものとしては

プロレタリア大衆文学の問題

## いはゆる「藝術の大衆化」について

## プロレタリア藝術確立運動と 解説 下し二回裏・新・二回裏

解決された問題と新しい問題

を通じて行はれた講説を要約すると、一九二九年以來、力衆的は、  
（一）プローチアーリーの政治活動の必要性、（二）運動員され

文學はプロレタリアリトの活動の影響を大衆に向つて拡大云々

又あらゆる社会現象の急速に

示した結果、今迄のわれの作品行動を、より強力に大衆化しな

ければならなくなつた。

之、大衆化論の起源であつて、われくはその大衆化の方法をより

正しく決定せんがために一応「プロレタリア芸術」の定義的吟味に迄

遡つた

そしてそこから今迄「

実はそのどちらもが本来のプロレタリア芸術であるといふことに結論を見出した。即ちプロレタリア芸術は本質として大衆的なものであり、大衆的でなくしては、その本質的存在のありえないものだといふことが見出されたわけである。

でわれ／＼の表現形式を切実に大衆化するにはどうしたらいいかといふことについては、進んで、中野重治は「取りかかるべき仕事の問題」として、われ／＼の作品が労働者農民の間に現実にどの程度にうけ入れられたのかを一定の方法によって判定し、それを一定の方針でセイリしつゝより真実なプロレタリアートのための藝術を育て上げ発展させなければならないといひ、之が藝術大衆化問題を具体的に解決する發足点だと說いた。

二、実践の欠如が問題を紛糾させている。

ところが昨年度（一九一九年）においては、この問題が恰もわれわれの間に何等の解決ももたらされてなきが如き様子で中心の問題となつて見らるつた。

この原因は明瞭である。

即ち前項に明らかなる通り、プロレタリア文學は本来大衆的な形式の下に存在するものでなければならぬのにも係らず、亦われ／＼はそうであることを（＊次頁行頭）

(6頁)

承認してゐるにも係らず、實際には相變らず自然主義文芸の様式の残滓を多分に混淆せる知識階級本位の形式を用ひてその作品を書いたからである。即ちルナチャルスキイの言葉でいへば「====」

「」の生産に固執したから「初步的な百万の大衆」乃至はその文化的利益を代表する各層からの相当烈しい大衆的非難に当面しなければならなかつた。紛糾の観はこゝにあつたのだと思ふ。

従つて今年も之が問題となるならば、こゝから出發するであらうし又しなければならない。

- 1 -

— 10 —

我々は我々の集團において議論され決定された方針の実践——といふ文学運動の領域における闘争の中に速かに|||||。そうすることによつてこの問題が遂に三日二解決——、言がちる。

(8  
頁)

(一) 何を書くべきかといふことについては「大会議事録」中「小説に関する報告」の中で、描くべき題材として列挙されてゐる題材に主眼を注ぐこと。(※次頁行頭へ)

又、我々は我々の作品行動に当つて、まず筆をとる前にその対象ををはつきりと認識してからねばならぬ。

### 三、行動綱領となるべき事項についての論議

7  
頁

で我々は当面の問題を実践に必要なる行動綱領に類する規定にまとめて、大会が決定し、中央委員会が中心となつて積極的に運用するところが、此際、特に必要ではなからうかと考へる。

そのたゞに私にこのヤシな事項に亘って「総帥喜氣」として考へてみた。討論的陳述と雑居してゐる次の粗雑な文中から、もし有用なものが要約されうるならば幸ひである。

(一) 我々は複雑な高い社会的内容を大多数の人々にすら感動せしめるやうな力強い芸術的単純さで表現すること及び「比較的単純な比較的初步的な内容によつてもいゝから幾百万大衆を感動せしめる得る」やうに表現することを我々の作品行動の中心として努力する。

知識階級に向けた作品行動は現在重要性に於いて前項の第二義にあるものと考へなければならぬ。(カツコ内の前項の二つとの規定は重要な問題を発生せしめると思ふ。それはあとで説明する)

(二)何を書くべきかといふことについては「大会議事録」中「小説に関する報告」の中で、描くべき題材として列挙されてゐる題材に主力を注ぐこと。（＊次頁行頭）

(8  
頁)

又、我々は我々の作品行動に当つて、まづ筆をとる前にその対象ををはつきりと認識してからねばならぬ。

書いてさへおけば今よまれなくともいつかはどの階級層かの間

でよまれるだらうといふやうな、まん然たる態度で書くことをやめなればならぬ。われ／＼の作品の目標とする「大衆」を階級に従つてまづ労働階級と農民階級にわけて認識しなるべくおの／＼の場合には、その階級に適當する題材を持ち込むやうにする。

そして、両階級を通じてその発達に応じて組織層に向かつてはなるだけ「複雑な高い社会的内容を力強い芸術的単純さで表現した」ものを持ち込み（戦キ（＊『戦旗』）に書く場合などが之に該すると思ふ）未組織層に向つては「比較的単純な、比較的初步的な内容による作品を持ち込むやうに努力する。

この考へ方は「初步的内容」

（考へる）の作品を認める点において、

〔大會議事録〕の空（＊次頁行頭）

（9頁）

氣に相反する如くみゆるのを、進んで指摘して置きたい。私の考へではイデオロギイの強化といふことは、質的に考へられるのとと共に量的にも觀察されなければならないと思ふ。そして、質的の強化といふことは、現在の社会に於いてよほど困難な制約をも伴つてくる。即ち検閲制度から的一大制肘である。質的強化は、理想的ではあってもそれを抹殺する権力機関が一方に懲存する以上現実的には、ある程度迄しか実現されえない。無限の強化は作品活動には到底行はれえないといふ現実を認識してからなればならぬ。

い。配布網の拡大強化を以て幾分之を救ひうることは事実であらう。（＊傍線は赤色手書き）けれどもそれにも限度の予想されなければならないことは我々は幾多のプロレタリア刊行物の経験によつて知らせられてゐる。

非常に文化的水準の低い——例へていへばブルジョア大衆文学の膝下に眠れる百万の未組織大衆には高い複雑なプロレタリアイデオロギイを受け入れる力はないであらう。その時かれらが受け入れうる「比較的単純な比較的初步的な」プロレタリア・イデオロギイを以てかれらをブルジョア大衆文学の影響下からこちらへ（＊次頁行頭）

（10頁）

獲得する作品を書く仕事は——「戦旗」を通じて行はれる可なり、又当面の重要性の少い仕事と思はれる。それだからそつといふ仕事は「複雑な高い」内容を受け入れうる先進労農層（組織層）をアジプロする文学の仕事よりも意義が少く、それは「作品の内容をもつとも後れた農民或は労働者の水準にまで低下させる」（藏原の言葉）といふことによつて

（考へる）の作品を認める点において、

〔大會議事録〕の空（＊次頁行頭）

されなければならないものだらうか？

藏原はこのことに関して「過程的」にさやうな低い「大衆」を「芸術との区別とその必要を必然的に認め、そして双方共「芸術的であることに變りはない」といつてゐる。同時に「眞のプロレタリア大衆芸術は

「ともいっている。私はここで藏原の本意が十分にわからぬのである。」

的（＊次頁行頭）

「二つの型の芸術を「芸術である」といふ風に考へるのではなからうか？」

（12頁）

水準を持たない広汎なる大衆である。

「あらはれる如上二つの型の芸術を「芸術である」といふ風に考へるのではなからうか？」

（11頁）

「いひつつも「過渡的な何等か劣つた芸術である」といふ風に考へるのではなからうか？」

「もしさうだと仮定すると、藏原の現実を把握する弁証法的的方法がそこでは曇つてゐるのではあるまいかと思ふのである。

「我々は問題を飽く迄も我々の現実から離してはならないと思ふ。我々は」

「進んだ大衆層への文学活動に検閲制度の強力なる制肘をうけ乍らも」  
「ならば、此のおくれた広汎なる大衆へ、初步的な、ゆるやかにされたプロレタリア・イデオロギイを注入する文学的活動は、かかる「強化」を増量するものではなく、それの解消を図る危険なる企てであらうか？」どちらだらうか？

「今迄だれからも確定的には答へられてゐないよう思ふこの問題を、私は自分自身で探索し、ゆるがせにしてはならない必要なる仕事だと考へるやうになり、この「もつともおくれた層」に対する文学活動を、むしろ「文学大衆化」の一番困難な先端的問題として、先に考へて來たのである。

「そして私自身の経験から、その表現形式の出発点となしうべきものをブルジョア大衆文学の中から見出した。

「ここでふれておく。

「『大会議事録』中十八枚目の批評に関する報告の「芸術大衆化」

（＊次頁行頭）

「の問題」の中に述べられてゐる二つの点、即ち私が「議事録に対する質問書」でふれた

「濟的さへ組織され得ない」とすれば、文学的に組織することなどは当分の間、可なり強硬に不可能であらう。といふことをいひかへればこの層は現在「戦旗」を受け入れうる文化か外側にある大衆的沃野である。そして政治的にさへ又経済的さへ組織され得ない」とすれば、文学的に組織することなどは当分の間、可なり強硬に不可能であらう。といふことをいひかへればこの層は現在「戦旗」を受け入れうる文化

|||||||

二、「大衆化の名の下にプロレタリア芸術に「講談社的形式」を導き入れやうとする傾向、

の二項である。質問書では之の二つ共、傾向としては同盟のどこへも、だれによつてもあらはれてゐない故に、之は有名無実に近い陳述だといふ意味の抗議を呈出した。しかし実際は大会直前によばれて行つた中央委員会の席上で、前者は徳永直によつて発言され、後者は私はによつて発言されたことなのである。けれども徳永の場合は、これを理論として主張したのではなく、可なり

まん然と質問的にそつといふことをいつたに過ぎないの

で、これを直ちに「最近の偏向」などと事々しく取り上げてこの「偏向についてはここにいふ迄もない」などと

一蹴し去らうとする中央委員会のやり方は少々冷酷と評（＊次頁行頭へ）

（14  
頁）

るべきである。それが「批評の報告」である以上、|||

|||||批評家の態度としてルナチャールスキイによつて懲懲されてゐる「兄弟のやうに親切に」若き未熟な作家を教え導くやうにする態度であらんことを希望するものである。後者の私の発言に該当する（二）に至つては議事録二十四枚目「報告文学に関する件」の記述中、大衆化の形式を「或者は所謂大衆文学の通俗的手法に依存しようとした……が、それは我々の「大衆化」における誤謬であり、大衆的形式に関する社会的根拠に

関する我々の盲目を物語る」といふ言葉とともに、当日のべた、又のべようとした正当な意味に殆どあてはまつてゐないものなのである。

殊に（二）の場合では誤解と無理解が甚だしく殆んど別のことを行つてゐる。之れは大会前のわずかな時間の会合で話し合ひの不足にも因由してゐることと思ふ。

私は如上のべる通り「おくれた大衆層」への働きかけを「文学大衆（＊次頁行頭）

（15  
頁）

化」の一番尖端的な、困難な問題としてきたので、私一人のことをいはせて貰ふならば、私が東京毎夕新聞に「ゴー・ストップ」を書かうとした一九二八年六月頃には「戦旗」には今日盛んないはゆる「報告文学」はまだ全然姿をあらはしてゐなかつた。当時の「戦旗」はまだ「高級なプロレタリア理論雑誌」の面影を持つてゐた。

でも今日のやうな「報告文学」が当時既にあつたとしてもたとへば「ゴー・ストップ」の表現形式をそこから適確に見つけ出してくれるとは速断できない。「報告文学」中にも或一婦人労働者の書いたもので、いはゆる「講談社的形式」よりもはるかに低級化したものも見うけるし、亦可なり高級な知識階級的意識の露出してゐるものもあつて、之に対しても通信員の身元調べを行ひとどかせることが先決問題として果たされなければ組織的に我々の仕事に役立たせられな

のひ、イデオロギイ的用語もふえてゐる。之が果して先進的労働者農民の記述とすればこの層は「既に可なり高い文化的水準を獲得した」層で、むしろ戦旗を通じて逆に「太陽のない町」や「蟹工船」などの影響を受けてゐるはしまいか。形式には大いに教へられるものがある。筈だと思つて調べてみたが「有り合はせの社会主義的常識」が一番多く拾ひ出されるといふ事実にぶつかった。それが最近号になると、文体がとく（＊次頁行頭）

致して記述が急テンポで単純であるといふ現象だ。私は前からこの急テンポの形式をブルジヨア作家菊池寛の作品からみつけだし、単純さを菊池及び中村武羅夫からみつけたして「プロレタリア小説」の形式に換可して使ってゐる、といふやうなことを参考に申しのべる。

しかし「報告文学」中からは、構成的な小説の文章に必要な形式がちよつと見出しかねる。小説の文章は、構成的でなければならない。特にプロレタリア長編小説には構成力のある言葉が入用だ。それらはたとへば某ブルジヨア作家が若い恋人と別れて汽車にのつて立つて行く男の気持を、汽車が動き出すと、プラットにだん／＼小さくなつて行く女の白い顔を見て「あの顔だけが眞実で、世の中がイカモノになつたやうな感じがした。」といふ手短かな言葉で現はしてゐたが、私はこの構成力の（＊次頁行頭）

ある洞察のきいた言葉は労働者にもわかると思ふ。何十日ぶりかで苦しい留置所から出て来た労働者が、いきなり春の夜の銀座の角にでもほり出された場合の感じを「＝＝＝＝＝」

言葉を換化して表ははとする。私なら之をそのままデヤーナリズムを通じて、対象層の中へ送りこむ。そして何等かの方法で直接の反響をきこうとさせる。失敗してゐるか、成功してゐるか。成功してゐるとわかればその言葉はもう試験済だ。かれら自身の言葉に換化して行つたものと考へたい。

又、神田伯山の「清水の次郎長」の中に黒駒の勝蔵の子分が、次郎長の所へ何かのかけ合ひにのり込んで行つて、こつとびどくやつつけられる場面がある。そこは大衆の最も痛快を感じる心理的な場面だ。伯山は、にげてかへつて、親分勝蔵にそれを報告する子分の言葉によつてもう一度その場面を——心理的快感を——聴衆に向つて再演する。次郎長の言葉が敵の子分の言葉に變つて二度同一場面で演ぜられる構成法、そこにぴつたりあらわれてくる言葉——それは、その構成法が争議団代表者が資本家と会見する切迫した感興のある場合を団員にそれを報告（＊次頁頭へ）

するかの又別の言葉で再現することによって読者の感情の沸騰を二重にできるだらうが、そういうふびつたりと小説の構成にはまる言葉といふものは「報告」文学に

ある。

私は今すぐ「戦旗」に組織できない「おくれた大衆」にアジ  
プロするより低度な文学の必要を一応認識する所から、当  
時の条件の下に、特にブルジョア大衆文学の形式だけをし  
らべたのである。今日の報告文学の如きものの発生してゐ  
る好機の下ではもとより之をしらべにかかることを怠りは  
しない積もりである。手取り早く一応しらべて見た結果が、  
これのみに、之を中心として大衆化の形式を出発させるこ  
との用意の手薄さを感じるものである。そして「いはゆる大  
衆文学の通俗的手法に依存しよう」とするのではなく、又、  
プロレタリア芸術を「封建的町人文學の形式にすりかへんと  
する」のではなく、それをマルクス主義芸術家らしく利用しよ  
うとする私の從来とったやうな「用意」が（＊次頁行頭）

ア・イ・オ・ロ・ギーは形式の中にふくまれる」といつてブルジョア大衆文学の形式位に「まかされないだけのプロレタリア・イデオロギーを持つてゐる筈である。我々は「批評」によつてトルストイからチエーホフから、「文戦」の作品から、それぞれに相応した客観的価値をぬき出してくるやうに「ブルジョア大衆文学」からだつてそれをぬき出してくる術を知つてゐる筈である。（＊次頁行頭）

尚かつ他のもつと有効な「用意」にも併用せられて差し支ないことを悟るものである。

そして何故私が「ブルジョア大衆文學」の形式をそんなに問題とするかといふ理由はそこにはいかなる文學形式の下に、おけるよりも、より多くの大衆を現實に把握してゐるからである。そこには大多数の讀者を吸收する何等かの文学的技術（反動的技術）があるのに相違ないのである。その反動的文学技術の内、質的換化のなしうる技術があるに相違ないとの見込みの下に、之れをしらべようとしてかゝるのである。

以上ここでは大会に對して二つのことを提案してゐる。即ち「おくれた層」への初步的なプロレタリア・イデオロギイをしか注入できないかった芸術の正当なる役割を設定せんとする案と、「報告文学」の形式が我々の正しい唯一の出発点であると論断せんとするとの留保を申出でる案（このことは提案「作品研究会の件」）に関連して申しのべる）である。このことを、大会の大衆的討論によつて、又大衆的決議による論議の方法を通じて、正当に決定せん」とを切望する次第である。

(四) 次にもし私の右の提案が認められるのならば、作品行動の「場所」の問題がより正しい見透しの下に解釈されなければならぬい。

即ち我々の作品行動は主として「進んだ層」のために、「戦旗」、戦旗社から出版する単行本、パンフレット、リーフレット、及地域的工場新聞雑誌、同盟に組織されたる同人雑誌をト、作品行動の場所とするやうになりはしないか。

か。（＊次頁行頭）

21  
頁

この区分は厳重な規定でないことは勿論で、交互に適当に

ただブルジョア出版物の利用について議事録は消極的な  
防御的態度をとつてゐるやうである。しかし私の考へでは  
ブルジョア出版物中、自由主義的諸雑誌は主としてイデオロギイ的訓練のあいまいな知識階級層に、又その他の出版物、新聞等は主として「おくれたる大衆層」にアヂプロする  
正当なる任務の下に積極的に利用されなければならない。  
それは少しでも階級的建設のために客観的価値ある凡ての  
形態を利用する＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝の態度として、採  
用されるべきが至當だと考へるのである。

「議事録」では、この根本原則が（一）戦旗社出版部の事業との利害の衝突といふこと、（二）従来ブルジョア・ヂヤナリズムに応じて行つた同盟員中の一部のイデオロギイ

22  
頁

的操持のルーズさに對する反感などのために一時掩ひかくされてゐるかのよう見受けられる。もとより、戦旗社の出版物を守らず、又同盟員たる左翼的立場を利用して売らんかないゝ加減なプロレタリア芸術の制作に專念するものがあれば、それは許せない階級的罪悪であるであらう。

けれども既に提案してゐる通り、組織は出来なくとも歴史のあ  
る重要な時期において、広汎なるおくれた大衆層を反動勢力  
群に変化させることを前以て防ぎとめることに役立つよう、彼  
等の数多くをブルジョア・イデオロギー下の嗜眠状態からよび  
させ、我等のイデオロギーの盛られた文学の読者として極力  
引きつけておくことはやはり重要であると考へられる。

かたが我が同僚員全体が打って一丸となつて単純化の上に貢献するに動員され全然他に割くべき余力がないといふ場合には、当面の仕事のために之の仕事が放棄されようとも或はやむをえないかもしれない。けれども我々はそんなにいそがしくはないようにもうける。「力」は徒らに蓄積され何でもない日常生活のために消費されてゐるやうにみえる。

同盟は戦旗社が消化し剩す同盟員の「力」の大きな過剰のかた

まりを（＊次頁行頭へ）

（23頁）

他の同様に（或は次ぎに）重要なべき仕事に向かって、計画的に動員しなければならないではないか。そのためには中央委員会は同盟員のために仕事をを組織する義務があるとさへいつてもいいと思ふのである。戦旗社の出版事業に追随した（とのみは云えないが……）ブルジョア出版業者の最近の傾向は

劇や映画に

おけるとほど同様、かれらのコンマーシャリズムの利益に転換できることを発見したための現象であつて、かかる情勢の中で戦旗社出版当事者がからコンマーシャリズムの形式をとり上げた以上、忽ち資本主義的自由競争の現実にさらされるのは当然の勢ひで、之をブルジョア出版業者の特別の「妨害」とでも、もしみなすやうなことがあつては、（＊一字不明）らないと思ふ。

たゞ同盟員は極力、あらゆる方法を構じ、この自由競争において、戦旗社のコンマーシャリズムを援助するのは同盟員としてむしろ名譽ある義務でなければならない。その必要のためにブルジョア・ヂャーナリズムの利用を徒らに「過大評価してゐる」とか「過小評価してゐる」とか見通しなきことをいはず、それを弁証法的に、有効に積極的に利用すべき事を主張されなければならぬのではなからうか？

（24頁）

（五）中野の「解決された問題と取りかるべき仕事」（＊中野重治「解決さ

れた問題と新しい仕事『戦旗』（九二八年十一月号）の問題として既にされてゐる方法の実行によって、報告文学やブルジョア大衆文学の弁証法的利用から一応われくの間に決定された大衆的形式の大衆的検覈が（＊一般には「検覈」——厳しく調べること）企てられ、そこから大衆直接の、訓練による大衆の芸術を育てて行くようになることが中野のいふ「芸術大衆化の問題を具体的に解決する正しい道」ではないだらうか。このことはすぐにこのことのために、作品研究会設置の提案に関連してくる。

## 統制に関する件 提案説明書

ブルジョアヂャーナリズムの需要を有する同盟員は同盟員中のごく一部に止まつてゐる。既にブルジョア・ヂャーナリズムの階級的利用の必要が決定されるとするならば——われくはその状態に対して、十分統制の手を加へる必要がある。

それは直接的には戦旗社の出版部強化のために、原則的には同盟員の作品（＊次頁行頭）

（25頁）

行動のブルジョア市場における金銭的利益は、個人に属せず、集団の所得とすべしといふ正しい思想の延長として、資本主義的原則により、個人主義的に（不公平に）支払はれるそれらの個人的收入に対して、同盟が、

一定割合による徴収を行ひ、それを同盟の基金として積み立て、戦旗社出版部強化のための貸出し、その他の諸活動に活用する

（＊この三行はやや大文字）

ことを、大会に於て、決定しなければならない。

少くともこの思想的原則は、大会において決議し、以て固き拘束力となすことが必要である。

そして同時に実行部は、同盟員の戦旗誌上からこぼれおちる過剰の力をブルジョア出版物、組織されたる同人雑誌、地域的工場新聞雑誌、その他すべての作品行動の必要なる場所に駆り出す役目をもなすべきである。

(26頁)

### 作品研究会設置の件 提案説明書

中野重治のいふ「われ／＼」の作品がどの程度に大衆に受け入れられたかを一定の方法によって測定してそれを整理してより真実なるプロレタリアートの芸術を育て上げることに役立てる科学的な方法を探求し、それによって作品の研究を行ふ常置的な研究キ閣の設置が「大衆化の問題」の重要な一翼としてぜひ必要であり、こゝに決議さるべきであると思ふ。

### 機関誌発行の件 提案説明書

「戦旗」が大衆的に発展して、今では之は大衆のものとなり、最早作家同盟の機関紙でなくなり、大衆の直接的な意志感情の表現機関となつてしまつたことは明らかである。このために会則の一部変更が提案され、文学理論の討議、作品批評の掲載等の同盟の内部活動（＊次

頁行頭）

(27頁)

の記録、宣伝のための新しい、主として理論的な機関雑誌の発行が、議事録中に提唱されてゐるが、大会は直ちにこのことを可決しようではないか。そして従来の同盟ニュースなども都合でこの中へ収録してしまつてもいいと思ふ。

